

熊本県葦北郡芦北町方言における待遇表現

尾 川 慧

1. はじめに

現代熊本方言には、様々な待遇表現が存在している。待遇表現というのは、話者の、聞き手や話題の人物に対する態度を表す表現であり、聞き手や話題の人物との人間関係や、その場面によって使い分けがなされている。待遇表現には、尊敬、謙譲、丁寧などの、聞き手や話題の人物を高く待遇する、いわゆる敬語表現だけでなく、聞き手や話題の人物を低く待遇する軽卑語的な表現も含まれる。方言の待遇表現についての研究もなされているが、方言研究は従来語彙研究に偏ったものが多く、地域ごとの詳しい研究はまだ不十分であるといえる。熊本県内地域における待遇表現についての論文も数が少ない。方言は地域ごとに細分化されているため、研究もより多くの地域で詳しく行う必要がある。そこで本稿では、これまで報告のない葦北郡芦北町に現存する待遇表現と、その使い分けについて調査した。さらに、方言の使用には、地域だけでなく世代によっても違いが表れる。本稿では、世代の異なる複数のインフォーマントに調査を行い、調査結果は熊本県内の他地域とも比較する。なお、本稿は著者の卒業論文（平成 29 年度熊本県立大学文学部）に加筆・修正したものである。

2. 先行研究

先行研究として、熊本県内諸地域の待遇表現についての論文を 2 つ挙げる。

1 つは村上（1997）で、熊本県中西部に位置する宇土市網津町旭方言における待遇表現について、70 代女性インフォーマントを対象に、調査票に従った面接調査が行われている。また、渡辺（2017）では、熊本県北部に位置する菊池郡大津町方言における待遇表現について、藤原（1978,1979）より当該地域に確認される見込みのある形式をまとめ、80 代女性インフォーマントを対象に調査。[-as-/-ras-]¹ 形式に関しては中年層、若年層も対象にした世代間調査が

1 本稿において [] は渡辺（2017）と同様に形式を示す場合に使う。

行われている。

3. 調査概要

次に、本稿における調査の対象地域、調査期間、対象インフォーマントについて述べる。

(1) 調査対象地域

本稿の調査対象地域である葦北郡芦北町は、熊本県南部に位置し、総面積233.81平方キロメートルの約80%に山々が連なる自然豊かな町である。西方に開けた芦北海岸は、天草の島々を望み、南に津奈木町と水俣市、東は球磨川を境に球磨村、北は八代市に隣接している。交通面では、町を南北に縦断する国道3号線を主要道路、肥薩おれんじ鉄道を主要交通機関とし、南九州西回り自動車道では、田浦インターと芦北インターが玄関口となっている。人口は約1万8千人で、世帯数は約7千4百世帯である。(芦北町ホームページ)今回は、西部地域での調査を行った。

(1) 調査期間

平成29年7月～11月

(2) 対象インフォーマント

芦北町に在住し、言語形成期を芦北町で過ごした9名(A-I)を対象とした。

A 80代男性

(0歳～85歳現在：熊本県葦北郡芦北町)

B 80代女性

(0歳～80歳現在：熊本県葦北郡芦北町)

C 60代女性

(0歳～63歳現在：熊本県葦北郡芦北町)

D 50代女性

(0歳～18歳：熊本県葦北郡芦北町、19歳～22歳：愛知県名古屋市、23歳～25歳：熊本県熊本市、26歳～27歳：熊本県菊陽郡菊陽町、28歳～32歳：熊本県菊陽郡大津町、33歳～53歳現在：熊本県葦北郡芦北町)

E 40代女性

(0歳～18歳：熊本県葦北郡芦北町、19歳～20歳：熊本県水俣市、21歳～43歳現在：熊本県葦北郡芦北町)

F 30代男性

(0歳～18歳：熊本県葦北郡芦北町、18歳～20歳：熊本県熊本市、21歳～33歳現在：熊本県葦北郡芦北町)

G 30代女性

(0歳～18歳：熊本県葦北郡芦北町、18歳～19歳：千葉県千葉市、20歳～21歳：茨城県つくば市、21歳～23歳：福岡県福岡市 23～25歳：山口県山口市、25歳～30歳現在：熊本県葦北郡芦北町)

H 30代女性

(0歳～18歳：熊本県葦北郡芦北町、20歳～25歳：熊本県宇土市、25歳～30歳現在 熊本県葦北郡芦北町)

I 20代男性

(0歳～22歳現在：熊本県葦北郡芦北町)

4. 調査・分析

4.1 使用形式の調査

4.1.1 調査方法

【調査1】

対象の地域で現在使用されている方言の待遇表現の形式を調べるため、まず斎藤（1958）及び、藤原（1978,1979）とその付録の図版から当該地域に確認される見込みのある待遇表現を以下のように抜き出した。必ずしも芦北地域に限定せず、水俣地域などの周辺地域で使用されると述べられているものも含む。

斎藤（1958）

ル、ラル、ナル、ナス、ナハル、ス、サス、ラス、マス（ヤス）、ゴザル、ゴザス

藤原（1978,1979）

ゴザル、レル・ラレル、シャル、サッシャル、ナハル、ナル、ナッス、ヤル

上記の形式に筆者の内省により使用されると思われる、「デス」を加えたものが以下の表1である。

表1 当該地域に確認される見込みのある形式

尊敬形	ゴザル、レル・ラレル、シヤル、サツシヤル、ナハル、ナル、ナッス、ヤル、ル・ラル、ス・サス・ラス、
丁寧形	マス (ヤス)、ゴザス、デス

表1にまとめた表現を一つずつ取り上げ、①使用するかどうか②使用方法についての2点をインフォーマントに尋ねた。

【調査2】

調査1の結果を受けて制作した調査票をもとに面接形式で行った。各形式を使用するかを尋ねた後、第三者敬語²に着目して、聞き手と話題の人物の組み合わせを考えて作った標準語の文を方言に翻訳してもらった。その結果を元に、別の言い方はしないか例文を作り、追加で質問をした。

4.1.2 調査結果と分析

表2 使用が確認された形式

インフォーマント	[-nar-] (ナル)	[-nahar-] (ナハル)	[-as-/ras-] (アス/ラス)	[-r-/rar-] (ル/ラル)	[-des-] (デス)	[-gozas-] (ゴザス)	[-mas-] (マス)
A・B	○	○	○	○	○	○	○
C	○	○	○	○	○	×	○
D	○	○	○	×	○	×	×
E	○	×	○	×	×	×	×
F	○	○	○	○	×	×	×
G	○	○	○	×	○	×	○
H	×	×	○	×	×	×	○
I	×	×	○	×	×	×	×

○：使用する ×：使用しない

調査1と調査2の結果からわかったことをまとめると、表2の通りである。面接調査の結果、[-nar-][-nahar-][-as-/ras-][-r-/rar-][-des-][-gozas-][-mas-]の7形式が現存していることがわかった。以降の節ではそれぞれの形式についての使

2 第三者敬語とは、会話をするとき、話し手と聞き手以外の話題の人物（第三者）に言及する際に用いられる敬語のことである。（辻・井上・柳村 2017）

用の詳細についてと世代差を分析する。なお、4.1.2.1 から 4.1.2.6 まで「使用形式」と「世代差」の観点で記すが、前者が主に調査 1、後者が主に調査 2 からわかったことである。また、世代の言及がない場合は、使用する人に共通した内省であることを意味する。

4.1.2.1 [-nar-][[-nahar-]]

(1) 使用形式

[-nar-] 形式と [-nahar-] 形式はどちらも尊敬形で用いられ、「先生の来ナッた」（先生が来られた）「先生の来ナハッた」（先生が来られた）のように、同じ意味で使うことができる。しかし話者の内省によると、敬意の差が見られ、[-nahar-] の方がより丁寧であるとのことだった。この 2 形式については藤原（1978）で「本県下に、「ナハル」と「ナル」とが、並び、よくおこなわれているのは、興味が深い。よいことばと、くだけたことばとの、成立・存立の相互関係が、ここに明らかであろう。」（p.297;22-23）と述べられている。このことを踏まえると、藤原（1978）の調査の時点でも同じ意味を持つ形式で敬意の使い分けがなされていたと考えられる。

(2) 世代差

[-nar-][[-nahar-]] 形式を使用するのは 30 代～ 80 代までだが、30 代～ 40 代の中年層では、使用にばらつきが見られた。40 代のインフォーマント E は、[-nar-] 形式の方だけを使用するようである。これは、[-nahar-] 形式の方がより丁寧であり、高年層への調査でも [-nar-] 形式より [-nahar-] 形式を使用することの方が多いとの結果が出ていることとも関係するだろう。インフォーマント E は、より丁寧な表現をする場合には標準語の敬語を使用すると述べている。改まった場でなく、相手が高齢の場合にのみ [-nar-] 形式を使用するとのことだった。そこまで高くない敬意の場合に [-nar-] 形式を使用し、改まった場及び、非常に高い敬意を表す場合には、標準語を使用するべきだという思考が働いているのだと考える。インフォーマント H と I では、使用が見られなかった。若年層である筆者の感覚でも、若年層で [-nar-][[-nahar-]] 形式を使用している人はあまり見かけない。

なお、特に 30 代に着目してみると、今回の調査で、30 代のインフォーマント F、G に [-nar-][[-nahar-]] 形式の使用が見られたのは 2 名とも病院や介護等の仕事で、高年層と話す機会が多いためである可能性も考えられる。100 円シヨ

ップで働くインフォーマント H は、敬語を使うなら標準語の敬語を使うと述べていた。このような状況から推測しても [-nar-][nahar-] 形式は、今後衰退していくと考えられる。

4.1.2.2 [-as-/-ras-]

(1) 使用形式

[-as-/-ras-] 形式は、「(生徒しかいない教室で) 先生の来ラスけん席に着かんね。」(先生が来られるから席に着きなよ。)のように、聞き手に、話者と聞き手以外の人のことを話す場面で用いる第三者敬語である。表 3 のように、対等以下の相手に目上の人と話をするときに使う、尊敬形として使用される。聞き手が目上の人の場合にこの表現を使用すると失礼にあたるため、聞き手が目上の場合にはこの形式は使用しない。このように、聞き手、話題の人物の両者との関係を考慮して使用する必要がある形式である。また、「お父さん(夫)の神棚に上げラシたもんね。」(お父さんが神棚に上げられたものね。³⁾ や「お母さん(妻)は頑張りよラシた。」(お母さんは頑張られていた。)など配偶者について話すときにも使用する。

表 3 [-as-/-ras-] の使用

		話題の人物		
		目上	対等	目下
聞き手	目上	×	×	×
	対等	○	×	×
	目下	○	×	×

また、調査の結果「あん人たちなんしとラスとやろか。」(あの人たちは何をしているんだろうか。)[「店員さんこラッサンね〜。」「店員さんこないね。】のように明確に目上の人だと言える人だけに使用しているわけではないことがわかった。インフォーマントはこの場合 [-nar-][nahar-] 形式は使用しないと述べており、このことから [-as-/-ras-] 形式は、[-nar-][nahar-] 形式よりも軽い敬意を表すことがわかる。

また、話者からみて話題の人物が対等・目下の人であっても、聞き手からみ

3 訳するとこのようになるが、筆者の直感では標準語ほどの敬意はないといえる。

て目上の人の場合には [-as-/ras-] 形式を使うことがある。例えば、話者からみて話題の人物が同僚、聞き手が部下の場合に、「主任がこう言いよラシたもんね。」（主任がこう言われていたもんね。）といったり、話者からみて話題の人物が妹、聞き手が姪の場合、「お母さんは元気しとラスね？」（お母さんは元気してる？）といったりすることができる。このとき「主任がこう言いよんナったもんね。」「お母さんは元気しとんナハルね？」のように、[-nar-][nahar-] 形式を使用することはない。このことから、[-as-/ras-] 形式は、より軽い敬意を表すことがわかる。藤原（1978）にあるように、[-as-/ras-] 形式は「～シャル・サッシャル」が転じたものだとすると、「～シャル・サッシャル」はややくだけた敬意表現法だとされているため、その敬意を引き継いでいると考えられる。

(2) 世代差

[-as-/ras-] 形式は、調査した中では、唯一どの世代でも使用される待遇表現であった。第三者のことを話すときに使用する表現で、話し相手が目上の人の場合には失礼にあたるため使用しない、というのほとんど共通していた。しかし、[-as-/ras-] 形式を使う人の中でインフォーマント G だけは、聞き手が目上の人の場合にも言うことができるし、目の前の人のことを言うときにもたまに使うことがあると回答した。また、他のインフォーマントの回答でも、自分は使わないけれど、聞き手について話すときに使う人もいる、というものがいくつかあった。神部（1992）に、「芦北地方では、天草同様、この形式を、対者——聞き手に関しても用いることがある。」(p.250;11-12) とあるように、天草地域と似た使い方をしている可能性があるが、話を聞いていると、聞き手に対して用いる人について「そういう失礼な言い方をする人もいるのだ」という言及の仕方をする人が多かったため、芦北町では、そういう使い方は標準的でなく、第三者に使う表現として定着していると考えられる。

また、話者からみて話題の人物が対等・目下の人であるが、聞き手からみて目上の人の場合には、50代より上の世代は [-as-/ras-] 形式を使用するが、40代より若い世代では使用は見られなかった。若い世代が第三者敬語を使うときに、話題の人物と自分（話者）の関係に重きを置いていることがわかる。

さらに、60代までは、男性も女性も配偶者のことを [-as-/ras-] 形式で言い表していたが、それより下の世代では使用されない。[-as-/ras-] 形式が身内尊敬用法で使われなくなった、もしくは、辻（2017）にあるように、身内尊敬自体を行わなくなったことが考えられるが、身内尊敬自体の調査を行っていない

めわからない。

4.1.2.3 [-r/-rar-]

(1) 使用形式

前述した[-as/-ras-]についての調査を行っている時にインフォーマント A から「来た」を「こラシた」ともいうし、「こライた」ということもあるという話があがった。これは[-as/-ras-]形式のイ音便化だと思ひ話を聞いていたのだが、その意味合いを尋ねるとインフォーマント A は、対等な人には「こライた」ちょっと上の人には「こラシた」を使うと述べており、「こライた」には丁寧さはないとのことだった。

神部(1992)では、「こラシた」と「こライた」について、元は同じ形式だったものが音便化したものとみなすか、別形式とみなすかが論じられており、「～ス・サ(ら)ス」連用形、「行カシタ」などの「～シ」の音便化とする説もあるが、それでは不安定な点もあると述べている。その理由として、「ほかに類同の音便形が見られにくいことである。天草では、前述のとおり、「行カシタ」などは聞き手に関しても用いられるが、「行カイタ」などは、その用法がほとんど見られない。また、「シャル」敬語がなく、したがってその派生敬語の「ス・サ(ら)ス」もない薩摩においても、「～イ」はおこなわれている。」(p.276;19-23)といったことを挙げている。これらのことから神部は「こラシた」と「こライた」を別形式であると述べており、筆者もこの考えに同意する。では、「こライた」はどういった表現形式なのかという点と、[-r/-rar-]形式(連用形[-i/-rai-])だと考えることができる。このことは、意味の面と九州地方における狭母音化傾向との2つの点から考えられる。意味の面については、神部(2007)では、「地域の生活になじんだ「ル・ラル」は、一般には、敬意というよりも親愛といったほうがふさわしい表現性を持っている。」(p.8;27-28)と述べられている。さらに[-r/-rar-]形式は話題の人物が第三者の場合に用いられるとあるため、インフォーマント A の回答とは、敬意はないということと、話題の人物が第三者の場合に用いるということが一致している。また、神部(1992)には、九州地方には狭母音化傾向が認められると記述されている。狭母音化には、ウ音便化の「Co > Cu」やイ音便化の「Ce > Ci」の例がある。ここでは、まずエ段音がイ段音に転化して「korareta > korarita」となり、次に「ri」の子音が脱落して「korarita > koraita」となったのだと考えられる。他にも九州では「kore > koi(これ)」「ore > oi(おれ)」のような例が見られる。このように、イン

フォーマント A の回答と、[-r-/rar-] 形式の持つ敬意の高さや使用対象が一致すること、さらに、音便化の例を見て、筆者もこの神部の説に同意したため、[-r-/rar-] 形式の項目を [-as-/ras-] 形式とは別に設けた。

対して、インフォーマント B は、「こラシた」と「こライた」の持つ意味合いは同じであるが、「こライた」の方が古い表現だと述べていた。このように、2つの表現に違いを感じていない人は、言い方の違いと捉えて使用しているのだろう。実際に芦北町（1977）の方言の一覧ページには、「こらいた・こらした 来られて」という記述があった。これをみると、芦北では「こライた」も「こラシた」もどちらも敬意を持った言い方がされていたことがわかる。そもそも、[-r-/rar-] 形式も元は尊敬形であったものの、敬意が逡減して、対等以下の人物について待遇する表現となったため、2つの言い方を同じ意味で使用している人がいるのにも頷ける。しかし、「こライた」の方が古い、という発言に対しては疑問を覚える。「こラシた」がイ音便化して「こライた」になることは考えられるが、言語変化の流れとしてその逆は考えづらい。インフォーマント B は、「ライた」という言い方は最近の人はしないと述べていた。世代差の調査の結果でも、若い世代では[-r-/rar-] の使用がほとんど見られなかったことから、インフォーマント B は、最近では使われなくなってきている表現だから古いものだ、と感じているのではないかと推測される。

(2) 世代差

この形式の使用は、60代～80代の高年層と、30代のインフォーマント F にもみ見られた。60代インフォーマント C は、[-r-/rar-] 形式の「こライた」を使う場合は話し相手が親しい人の場合で、目上の人のことは言わないと述べている。自分の配偶者相手に「あん人たちの来ライたよ。」と言うことはできるが、「社長さんの来ライたよ。」と言うことはできない。インフォーマント A と同じで、対等以下の人物への使用に限ることがわかる。また、50代インフォーマント D は、自分は使用しないが「こライた」に荒い言葉のイメージを持っていると述べていた。対して30代インフォーマント F は、インフォーマント B と同様に表現の違いだと述べていた。これらのことから、芦北町における [-ita-] は、同等以下の人に使う待遇表現の [-r-/rar-] 形式として使用している人と、[-as-/ras-] 形式のイ音便として使用している人が混在していると考えられる。インフォーマント F を除く中年層以下の世代では、「こライた」や「言ワイた」などの言い方はしない、という回答がなされたため、イ音便化の説のように、音として連用形の [-i-/rai-] が残ることはあっても、対等以下への待

遇表現である [-r-/rar-] 形式は衰退していくと考えられる。

[-as-/ras-] 形式と、[-r-/rar-] 形式について、インフォーマント A の結果を基にまとめると下記の表 4 のようになる。当該地域では、話題の人物や聞き手に合わせて、待遇表現の使い分けが細くなされていることがわかる。

表 4 第三者敬語の使用（インフォーマント A の場合）

		話題の人物		
		目上	対等	目下
聞き手	目上	×	×	×
	対等	[-as-/ras-]	[-r-/rar-]	[-r-/rar-]
	目下	[-as-/ras-]	[-r-/rar-]	[-r-/rar-]

主語が「あん人たち」（あの人たち）のような、必ずしも目上とも言えない人の場合、[-as-/ras-] 形式も、[-r-/rar-] 形式も使用することができる。この場合、「あの人たち」が誰を指すかと、発話者の心的態度によって、使い分けがなされると考えられる。

4.1.2.4 [-des-]

(1) 使用形式

この [-des-] は、動詞の終止連体形に接続するものであり、丁寧の意味で使用する。「(同僚の) 佐藤が来るデスよ。」(佐藤が来ますよ。) のように目上の人に対して、対等・目下の人のことをいう表現である。この形式も第三者のことを話すときに使用する。面と向かった相手に「明日は仕事に行くデスカ。」と言うことはできない。

(2) 世代差

インフォーマント G を除き、40 代以下での使用は見られなかった。渡辺 (2017) では、丁寧表現の枠組みに [-as-/ras-] 形式が入ってきたために衰退した、と述べられていたが、芦北地域の若年層では丁寧表現として、標準語が使用されており、丁寧形の方言自体が衰退しているといえる。

4.1.2.5 [-gozas-]

(1) 使用形式

「よゴザス」などの形で使う丁寧形である。他に「さみしゅうゴザス」、などがあり、形容詞に接続するのかと考えられるが、話者もあまり使用例は思い浮かばないとのことだった。使う人がいなくなってきたこともあり、あまり最近では使わない化石化した表現であるようだ。

藤原(1979)では、天草では「オハヨ ゴザス。」(おはようございます。)[「アリガト ゴザシタ。」(ありがとうございました。)]の“[「ゴザス」形”と「ハーイ、ワッカ トキャ イッタ コタ ゴザスバッテ、アンター。」(はい、若いときはいったことはございますけれど、ね。)]の“[「ゴザシ」連用形”がよく行われていると述べられている。今回の調査では、本動詞としての使用ではなく、藤原がいう“[「ゴザス」形”、すなわち、形容詞の連用形に接続する補助動詞的な用法しか見られなかった。

(2) 世代差

調査1でインフォーマントBが最近では使わない表現であると言っていたのだが、確かに調査2では60代より下の世代での[-gozas-]形式の使用は見られなかった。60代より若い世代では、どのインフォーマントも意味はわかると述べていたが、使用する人がいないため、このまま衰退していくと考えられる。

4.1.2.6 [-mas-]

(1) 使用形式

丁寧形であり、「すみマッセン」など「マッセン」の形で使用することが多い。藤原(1978)には、「熊本県下は、「マッスル」系の言いかたをよく見せている。「マッセ(シユン)」「マッシュョー」「マッシュユ」などがよくおこなわれており、命令形「マッセ(シエ)」の用いられることもさかんである。」(p.368;11-13)とある。今回の調査の結果では、「マッセン」の形以外の使用は見られなかった。「すみマッセンばってんお願いしてよかですか。」(すみませんが、お願いしていいですか。)など、「すみマッセンばってん」という形での決まり文句的な使用が多くみられる。

(2) 世代差

80代60代と、間が空いて30代の使用がみられた。調査の結果、「すみマッセン」の形でのみ使用されており、決まり文句として使用されていると考えられる。

以上の7形式が、当該地域で使用されている待遇表現である。尊敬形と、丁寧形の2つが見られた。

5. 先行研究との比較・考察

5.1 [-nar-][nahar-]

今まで広い世代で使用されていたと思われる [-nar-][nahar-] 形式は、若い世代にかけて使用されなくなっており、このままでは衰退してしまうといえよう。その原因として、標準語の尊敬語「レル・ラレル」と領域が被っていることが考えられる。[-nar-][nahar-] 形式を使用すると回答した60代インフォーマントCや50代インフォーマントDも改まった場では標準語を使用すると述べており、さらに下の世代の30代インフォーマントHは、敬語を使うなら標準語を使う、と言い切っている。テレビやインターネットなどの影響で幼いころから標準語になじみが深い世代でもあるため、[-nar-][nahar-] 形式の前に標準語の敬語が身に付いた可能性がある。また、自分の親が目上の人と話しているのを聞く機会があまりないことも関係していると言える。筆者の内省として、自分(子供)の前では [-as-/ras-] 形式を使って第三者の話をするの方が多いと感じる。40代インフォーマントEは、祖父母と同じ家に住んでいなかったため、嫁いだ先で方言を覚えたと言っていた。それまでは、標準語しか話せなかったということである。このように、周りに方言を話す人がいる環境であるかどうかも関係すると考える。今回の調査では20代の使用は見られなかったが、敬語の習得は社会人になってからも考えられるため、今後調査を続けると、時間が経過しても、20代の使用はみられず、それより上の世代では使用される、という状況になることも推測される。

5.2 [-as-/ras-]

先行研究とは、使用方法の違いが見られたものに、[-as-/ras-] 形式がある。芦北町における [-as-/ras-] 形式は、対等以下の相手に目上の人と話をするときに、尊敬形として使用される。聞き手のことを話すときには使えない第三者敬語である。しかし、先行研究を見ると、藤原(1978)では、「～ス・サス」は「～シャル・サッシャル」が転じたものとした上で、「ただし、「～シャル・サッシャル」に対する「～ス・サス」には、おのずから、待遇価その他の特性が出ている。」(p.291;21-22)と述べ、熊本市では、「「おらす」は敬語で

はない。」「ス」は“むしろ対等以下に”などと考える土地人は多いらしい。」(p.291;27-p.292;1)と述べられている。このように、熊本市域をはじめとする県北部地域では、[-as-/ras-]形式は、対等以下に使用する形式だとされており、芦北町でみられる用法とは大きな差が見られる。尊敬形としての用法は、天草地方の[-as-/ras-]形式の使用と一致している。天草と芦北の用法が一致することはそんなに驚くことではない。なぜなら、芦北町(1977)では、「芦北地方は、いちおう文化的に孤立した地域で、独自の民族を持っている様で、孤立した地域だけに(三太郎⁴によってさえぎられた)歴史的に薩摩や天草地方との交流があり熊本文化よりも、その影響を受け、その要素の方が濃い。」(p.669;14-16)と述べられているからだ。このことから、芦北町では、[-as-/ras-]形式を天草と同様に尊敬形として用いていると考えられる。しかし、天草では、[-as-/ras-]形式を二人称三人称関係なく使用することができる(神部1992)。この点に関しては違いが見られた。

秋山・吉岡(1991)には、

天草では面と向かって「今日は家に、おらすとですか」(いらっしゃるのですか)とも言えるほど敬意は高いが、県北部や熊本市の規範意識からすれば、目上の人に使ったら軽卑語(見下げた言い方)になってしまう。(中略)これは周辺部ではまだ高い敬意を保っている古い敬語が中心部では敬意をすり減らしてしまっているからで、敬意通減の法則を地理的にあてはめられる現象と考えられる。(p.198;1-6)

と記述されている。また、藤原(1978)には、

「おてもやん」で、

○あん人たちの おらすけんで

にもうかがわれるとおおり、ものとしては、やはり、軽いながらも敬意を表示するものであろう。(p.292;2-4)

とある。「おてもやん」は1935年に発表された熊本県の民謡である。作詞をし

4 八代市日奈久地区から水俣市の間にある薩摩街道上の峠の総称。赤松太郎峠、佐敷太郎峠、津奈木太郎峠をいう。三太郎峠は九州の北部と南部を結ぶ交通上の難所とされた。(竹内理三編 1987:530)

た永田イネ（1865年～1938年）は熊本市米屋町（現熊本市中央区米屋町）出身である。（旅ムック.com 熊本）「あん人たち」とは、村の世話役のことであり、その人たちのことを目下に見ているとは思えないため、熊本市域でも敬意を示していたと考えられる。このことから、芦北町では、熊本市域では失われている、[-as/-ras-]形式が本来持っていた敬語の用法が残っていると考えてよいのではないか。

藤原（1978）に「対者にもふつうにつかわれる「シャル・サッシャル」が、「ス・サス」の形のものになると、用法上に分化がおきた。——方言語法の展開発展である。」（p.292;19-20）とある。芦北町での [-as/-ras-] 形式の用法は、「シャル・サッシャル」の尊敬用法の意味合いを残しつつ、渡辺（2017）その他の先行研究で、熊本市を中心とした熊本県諸地域での使用方法として述べられている、第三者に対して使用する、という分化を起こしていると考えられる。

芦北地域での [-as/-ras-] 形式の持つ意味と、渡辺（2017）や、その他先行研究に挙げられた熊本市や熊本県北部での意味とに違いが表れたが、筆者は、「おもやん」の例にもあるように、熊本県北部でも本来軽い敬意を表す表現として、同じような用法で使用されていたと考える。元々は芦北町のように尊敬形として使われていたものが、「敬意逡減の法則」（秋山・吉岡 1991）により、尊敬機能を失ったため、大津町の高年層のように下向きに使う待遇表現になったのだと考える。しかし、現在の熊本市域や、県北部域では、[-as/-ras-]形式は丁寧語化しており、若年層では話題の人物が目上・対等・目下すべての場合に用いることができる。県北部に位置する山鹿方言での [-as/-ras-] 形式について、瀬口（1968）では、話題の人物は身近な友人や目下であり、少し敬意をもって話すときに使用すると述べている。さらに、当然敬意を払うべき人や目上の人を話題とすると、その人物を卑下した話し方になるとある。このことについては、斎藤（1958）の「ス・サス・ラス」を、自分より目上に使えば卑下、目下に使ったら親愛になる。」（p.54;2）と一致している。対等や目下には軽い敬意をもって話すことができても、目上に使うと失礼になってしまう、という [-as/-ras-] 形式の敬意が薄れていく中での一段階だったのだろう。しかし、瀬口（1968）には次のようにある。論文に記載はなかったが、引用中の「小・男」は小学生の男子を指すと思われる。

ところが、次のような場面をよく見受ける。

（口）、教室に向って歩いて来る先生を見て、

○センシエーノ コラシタ バーイ。 先生がいらっしゃったよ。(小・男→先生)

と呼ぶ。これは、先生に対する見下げた気持ちからではない。子どもの、特殊な先生の立場にあって、傍観的な見方と、且つ親しみをこめた親愛感の表現であろうと思われる。(p.60;10-p.61;7)

これをみると、一般には目上とされる人物を話題に上げていても、下向きの待遇ではなく、親愛を表現することがあったことがわかる。上の例は、話者が先生に目上というより身近な存在であるという意識を持っていたのではないかと考える。あるいは世代差がすでに生じていたかもしれない。[-as-/ras-]形式の使用の広がりについて、2つの観点から考える。

まず、話者の持つ対象への親愛の観点である。場面は違うが、今回の芦北町での調査でも、聞き手が対等以下の場合にしか使用しないとされていた [-as-/ras-]形式を、20代インフォーマントIは、聞き手を上司に設定したときでも使用できると回答した。しかし、聞き手を学校の先生にしたときには [-as-/ras-]形式は使用できないと述べていた。これは、インフォーマントIの想定した上司が、立場は上であっても、目上として認識していない、親しい人物であったためであると考えられる。このように、山鹿市の例でも、話者が話題の人物をどう捉えているかによって、その形式を使用可能な対象の枠が動いていると考えることができる。そのため、生徒から見た先生のような、一般に目上といわれる人物を話題としたときの [-as-/ras-]形式の用法が、対等以下の人物を話題としたときと同じく、親愛を表すものになったのではないだろうか。現在の熊本県北部地域における [-as-/ras-]形式は、この山鹿市の例のように、話題の人物が対等・目下の場合に限って親愛を表していたものが、その対象を拡大し、親しい目上にも使用できるようになり、さらに対象の範囲を拡大して目上・対等・目下問わず使用できる表現になったのではないかと考えることができる。

次に、他方言との接触の観点である。渡辺(2017)では、大津地域での [-as-/ras-]形式の丁寧語化は本来尊敬語であった [-as-/ras-]形式の尊敬機能の希薄化及び敬意のニュートラル化による「尊敬形の丁寧化現象」によるものと述べられている。しかし、高年層では、発話者の心的態度や軽卑語的な意味合いが含まれる場合があるため、話題の人物が目上や対等の場合に、[-as-/ras-]形式を使用することはできないという結果が出ていた。さらに、目下の人のことをいうときでさえ、下向きの「非ていねい」な運用がされている。尊敬機能が

希薄化して丁寧語に留まるのではなく、それよりも下向きの待遇表現になっていると考えられる。その状態から、中～若年層が [-as/-ras-] 形式を丁寧表現として使用するようになるのには、なんらかのきっかけがあったのではないかと考えた。熊本市周辺は、県内各地からたくさんの人々が移り住んでくる地域である。そのため、各地域から来た人々が持ち寄った方言の影響を受けている可能性が考えられる。芦北地方や、天草地方から来た人々が、話題の人物が目上の人の場合でも [-as/-ras-] 形式を使用しているのに触れて、その影響を受けたことも一因として挙げられる。今の大津町の高年層のように、元々目下への使用がなされていたところに目上への使用が加わったことによって、目上にも対等にも目下にも使える、丁寧表現となった可能性があるだろう。また、先ほど挙げた山鹿市のように、同等以下を話題とするときには軽い敬意を表す地域などの影響を受け、丁寧表現として使用できるようになったことも考えられる。

今の芦北町での [-as/-ras-] 形式は、渡辺 (2017) を踏まえて考えると、大津町に推測される高年層以前 (80代より上の世代) の使用と一致している。今後は県北部地域と同じ道をたどる可能性がないとは言い切れないだろう。

衰退しつつある形式が多い中で、[-as/-ras-] 形式は、若年層でも普及している形式である。その理由として、[-as/-ras-] 形式は、第三者敬語であるため標準語に置き換えにくいことが挙げられる。また、[-as/-ras-] 形式は、軽い敬意や丁寧さ、親愛を表現するが、これらの意味を含むことを考えると標準語に置き換えにくい。どのインフォーマントも使用すると回答した「店員さんこラッさんね」という表現であるが、標準語に翻訳すると「店員さん来ないね。」となる。「店員さん来られないね。」というほど敬意は高くないが、ただ「来ないね。」というよりは敬意が含まれているのである。このように待遇表現として、便利な表現のため、すべての世代で使用されていると考えられる。

また、[-as/-ras-] 形式が、県内の他地域のように丁寧語化していないことには、[-r/-rar-] が残存していたことも一因として挙げられる。神部 (1997) に次のようにある。「この地域には、前項の「～ル・ラル」が比較的よく残存しており、その表現性が、ちょうど熊本市域など北部の「～ス・ラス」に似通っている。つまり、北部域では、「～ル・ラル」の衰退につれて、その後を襲うように、「～ス・ラス」が特殊化しつつあるわけである。」(p.250;12-16) ここにあるように、当該地域における [-r/-rar-] は、渡辺 (2017) の高年層の使用する [-as/-ras-] のような、下向きの待遇である。北部地域では、[-r/-rar-] の抜けた穴を補うために [-as/-ras-] が尊敬用法から変化したのだと推測することができる。逆に言え

ば、芦北では、[-r-/-rar-]が残っていたからこそ [-as-/-ras-] 形式が尊敬形のまま、使用されているといえる。

芦北町における今後の [-as-/-ras-] 形式について考えてみると、形式は残っても、完全に目上の人とは言えない店員にも使える、丁寧さを表す、などの点から、使用の範囲が広がることが考えられる。さらに熊本県の中心地である、熊本市の影響を受け、目上・対等・目下と相手を問わず使用できる丁寧形になる可能性もあるだろう。今の時点で、[-as-/-ras-] 形式には [-nar-][-nahar-] 形式ほどの高い敬意もないため、変化が起りやすいのではないかと考える。また、30代のインフォーマント G と H が第三者敬語を使用しない、と述べていた点にも着目したい。[-as-/-ras-] 形式の使用について、教室で、同級生相手に「先生が来るから席について」と言う文を方言の敬語に翻訳するとき、「先生の来ラスけん席ついて」という回答が多かったのだが、インフォーマント G と H は、「先生が来るけん席ついて」と答えた。この2名によると、聞き手が対等もしくは目下の場合には、話題の人物が目上の人であっても敬語は使わないとのことだった。辻・井上・柳村 (2016) では、愛知県岡崎市における第三者敬語についての調査が行われている。この調査から、話し手と話し相手、話題の人物の関係性によって、尊敬語を使用するかどうかが述べられた。【話し手=話し相手<話題の人物】という場面で尊敬語を使用しないとする回答は、70代では女性が0%、男性が20%強であったが、世代が低くなるに従ってその割合はさらに増加し、20代ではほぼ全員が使用しないという結果となった。この場面は先ほど述べた、教室での人物の関係性と同一である。辻 (2017) では、第三者敬語は東日本を中心に衰退の一途を辿っているが、西日本ではまだ残っているとところも多い、という調査の結果があった。本稿での調査結果をみても、[-as-/-ras-] を尊敬形として使用することもあり、第三者敬語は残っているといえる。しかし、インフォーマント G、H の傾向をみると、芦北町でも岡崎市と同様に、若い世代では聞き手が対等もしくは目下の場合には、第三者敬語が使用されなくなっていくことが予想される。その場合には、表3を見てもわかる通り、[-as-/-ras-] の表す範囲がなくなってしまう。インフォーマント G の調査結果をまとめたものが表5である。

表5 インフォーマントGの調査結果

話題の人物

	目上	対等	目下
聞き手	目上	[-nar-][-nahar-] [-as-/-ras-]	×
	対等	×	×
	目下	×	×

インフォーマントGは、[-as-/-ras-]形式を聞き手が目上の人の場合にも使用するといっていたためこのような結果となっている。聞き手が目上の人の場合のみに敬語を使用する。インフォーマントHは、使用する形式に[-as-/-ras-]形式と[-mas-]形式のみを挙げている。しかし、[-as-/-ras-]形式を使うことはある気がする、と回答したが、場面を設定してもピンとこないようだった。その理由として、聞き手が対等もしくは目下の場合には、話題の人物が目上の人であっても敬語([-as-/-ras-])は使わないと述べていたことと、[-as-/-ras-]形式は本来聞き手が目上の人の場合には用いないものであることから、インフォーマントHが[-as-/-ras-]形式を敬語としては使用していないからではないかと考えた。普段[-as-/-ras-]を丁寧形として使用している可能性も考えられる。敬語を使うなら標準語の敬語を使うと述べていたこともあり、この先、[-nar-][-nahar-]形式にあたる尊敬形は標準語の尊敬形に、[-as-/-ras-]形式は第三者待遇で使用する丁寧形になることも考えられる。

5.3 [-r-/-rar-]

[-as-/-ras-]形式は、天草地方での使用方法と、尊敬形という点では一致していたが、聞き手のことを言い表すときにも使用できるかどうかという点で違いが見られた。しかし、[-r-/-rar-]形式は、使用場面も天草と一致する。藤原(1978)では、「この「行かいた」について、天草の土地人は、“形だけの敬語で、敬意はなくなっている。”とか、“目下のものにも、ふざけて軽く敬語をつかってみたい時、行かいたなどと言う。”とか言っている。」(p.252;17-19)

天草では、概括するならば、

行きナシた

最上

行かシた

次上

行かいた（こライた）・行かッた（こラッた） 次位（p.252;21-24）

と述べられている。インフォーマント A の内省でも、敬意の高さは「こラシた>こライた」だったため、天草での使用と一致しているといえよう。さらに、神部（1992）には、

敬意が逡減し、敬語の実質が低下してくるに従って、現前の聞き手に関しては、その敬語を用いにくくなることがある。対話の緊張関係のなかで、その相手を遇するには、敬意の実質が薄れすぎているのである。「～ル・ラル」がまさにそれで、第三者に関してのみ用いられている。第三者——三人称の世界は、対人意識によって拘束されることの少ない、いわば客体の世界である。（p.239;12-17）

とある。このことから、天草での [-r/-rar-] 形式も、話題の人物が第三者の場合にのみ使用されることがわかる。芦北町で [-as-/ras-] 形式と [-r/-rar-] 形式の意味の使い分けをしている人にとっては、芦北で使用される [-r/-rar-] 形式は、敬意が逡減した後の天草での [-r/-rar-] 形式と同じ使用方法であることがわかる。

5.4 [-des-][gozas-][mas-]

その他、丁寧形でも衰退が見られている。丁寧形式に関しては、高年層でさえ、どの形式も決まり文句的に使われており、生産性がないことから、すでにある程度衰退してしまっていると考えられる。表 2 の結果と合わせてみても、芦北町は、敬語の中でも丁寧形から衰退し始めている地域だといえる。

芦北町方言における待遇表現の敬意の高さをまとめると、以下の通りになる。

高年層	[-nahar-] > [-nar-] > [-as-/ras-] > [-r/-rar-]
中年層	標準語尊敬形 > [-nahar-] > [-nar-] > [-as-/ras-]
若年層	標準語尊敬形 > [-as-/ras-]

このように、若い世代になるにつれ、標準語の尊敬形を一番敬意の高いものとして使用し、それに伴い使用する方言形の数が増少していることがわかる。

6. まとめと今後の課題

熊本県葦北郡芦北町方言で使用されている待遇表現の形式は [-nar-][-nahar-] [-as-/-ras-][-r-/-rar-][-des-][-gozas-][-mas-] の7つであった。[-nar-][-nahar-] 形式は尊敬形で、意味合いとしてはどちらの形式も同じだが [-nahar-] 形式の敬意の方が高い。標準語の尊敬語と運用が重なることもあり、若年層では衰退しつつある形式である。[-as-/-ras-] 形式は、話題の人物が第三者の場合に使用する第三者敬語である。話題の人物が目上の人であり、聞き手が対等または目下の際に使用し、話題の人物に対する軽い敬意を表す。[-r-/-rar-] 形式も、話題の人物が第三者の場合に使用する形式であるが、話題の人物は対等もしくは目下の人に限られる。敬意はなく、親愛などの意味合いを持つ。対等以下への待遇表現はこの形式のみが見られたが、中年層以降ではこの用法は見られない。[-des-] 形式は、丁寧形であり、動詞の終止連体形に接続する。この形式も若い世代では、意味は分かるが使用しない人が多くなる。[-gozas-] 形式は、「よゴザス」などの形で使う丁寧形である。80代以外での使用は見られず、衰退しているようである。[-mas-] 形式も丁寧形であり、「すみマッセン」など「マッセン」の形（「マッスル」形）で使用する人が多い。「すみマッセン」の形での使用は30代でも見られたが、化石化した表現であり、今後衰退する可能性がある。総じてみると、芦北町では、若い世代になるにつれて使用する方言形の数には減っているが、地理的な問題なのか、熊本市などの県北部と比べて、より古い表現が残っていることがわかった。60代～80代の高年層が使用する形式をまとめたものが以下の表6である。

表6 高年層の使用形式

		話題の人物		
		目上	対等	目下
聞き手	目上	[-nar-][-nahar-]	[-des-]	[-des-]
	対等	[-nar-][-nahar-] [-as-/-ras-]	[-r-/-rar-]	[-r-/-rar-]
	目下	[-nar-][-nahar-] [-as-/-ras-]	[-r-/-rar-]	[-r-/-rar-]

このように、芦北町方言では、聞き手や話題の人物に合わせて細かく使用形式を使い分けていることがわかる。高年層では第三者待遇も幅広いが、世代を追うごとにその形式や使用方法が衰退していくことが考えられる。50代より上

の世代では、同世代の中では調査結果が一致することが多かったが、40代より若い世代では、同世代であっても使用にブレが見られたため、より細かい世代差を確認するために、今後さらに20代～40代への詳しい調査を行うことが求められる。また、今後の課題として、話し手と聞き手、話し手と話題の人物の関係だけでなく、聞き手と話題の人物の関係にも着目して調査を行うことが求められる。4.1.2.2にあるように、今回は【聞き手<話題の人物<話し手】の場合のみ三者の関係を考えて調査を行ったが、聞き手と話題の人物の関係によっては、話題の人物が話し手からみて目下の場合でも、[-as/-ras-]形式を使用するという結果が出ている。このように、話し手、聞き手、話題の人物のすべての組み合わせを踏まえた場面を想定すると、使用する形式にも違いが出てくると考えられる。さらに、[-as/-ras-]形式について、使用の地域差の調査を行いたい。村上(1997)では、宇土市方言では「ス・ら+ス」はもっぱら第三者場面に使用される。話題の人物が目上であれば、軽卑語にも受け取られる」(p.223;7-8)と記述されている。また、八代以南の地域についての記述がされている斎藤(1958)では、[-as/-ras-]形式について「ス・サス・ラス」を、自分より目上に使えば卑下、目下に使ったら親愛になる。」(p.54;2)と述べられていた。このことから、より北部に位置する八代市周辺では[-as/-ras-]形式が芦北町と違う用法で使われていたと考えることができる。大津、熊本、宇土、八代、芦北と南に下る中で、少しずつ使用の違いが見られることがわかった。八代以南では、どの辺りの地域から[-as/-ras-]形式が尊敬形として使用され始めているのかを調査したい。芦北町(1977)に、三太郎峠によって、芦北が孤立した地域になったという記述があったことから筆者は、三太郎峠のうち一番北にある赤松太郎峠の通る、八代市日奈久地区周辺が境界線ではないかと推測する。今回の調査では、芦北町における待遇表現の使用形式を踏まえて、熊本県北部地域における[-as/-ras-]形式の使用の変遷についても言及した。このように、ひとつの地域のみでなく、他地域の調査もすることで、より多くの視点から分析することが求められる。

今回の調査では、主に芦北町の西側に住むインフォーマントに調査を行ったが、同じ町内でも場所によってさらに使用形式や使用方法が異なる可能性が考えられる。この結果を一概に芦北町の使用状況だということはできないため、今後データをより確かなものにするために、町内の他の地域での調査が必要となる。

引用文献

- 秋山正次・吉岡泰夫（1991）『暮らしに生きる熊本の方言』熊本日日新聞社。
芦北町（1977）『芦北町誌』芦北町。
神部宏泰（1992）『九州方言の表現論的研究』和泉書院。
神部宏泰（2007）『方言の論理 方言にひもとく日本語史』和泉書院。
斎藤俊三（1958）『熊本県南部方言考』熊本県南部方言考刊行会。
瀬口スミ子（1968）「山鹿方言の敬語法」熊本女子大学卒業論文（昭和43年度）。
竹内理三編（1987）『角川日本地名大辞典 43 熊本県』角川書店。
辻加代子・井上史雄・柳村裕（2016）「岡崎における第三者敬語の位置づけ——「第三者尊敬表現」, 「第三者謙讓表現」各場面のデータを中心に——」『国立国語研究所論集』第11号 147-166。
辻加代子（2017）「方言敬語への新視点—第三者敬語の用法に注目して—」『日本語学』第36巻6号 38-51。
藤原与一（1978）『方言敬語法の研究 昭和日本語方言の総合的研究 第一巻』春陽堂。
藤原与一（1979）『方言敬語法の研究 昭和日本語方言の総合的研究 第二巻』春陽堂。
村上敬一（1997）「熊本県宇土市網津町旭方言の待遇表現」『方言資料叢刊』第7巻 219-223。
渡辺千尋（2017）「熊本県菊池郡大津町方言における待遇表現」『国文研究』第62号 63-82。

引用 URL

- 「芦北町ホームページ」最終アクセス日 2018年1月7日
(<http://www.ashikita-t.kumamoto-sgn.jp/www/contents/1266380434052/index.html>)
「旅ムック.com 熊本」最終アクセス日 2018年1月7日
(<http://kumamoto.tabimook.com/greate/detail/25>)

謝辞

本論文を執筆するにあたり、丁寧かつ熱心なご指導をいただいた小川晋史准教授に心より感謝致します。また、お忙しい中調査にご協力いただいた9名の方々にも感謝の気持ちとお礼を申し上げます。